

I. 経緯

1. 調査に至る経緯

埼玉県大井町は、首都圏30km圏内の県西南部に位置し、畑作を中心とする純農村地帯であったが、昭和30年代後半からのいわゆる地域開発ブームの渦中に、本町もさらされ、スプロール化が進み、建て売り住宅のラッシュが見られるようになった。人口と世帯数は昭和40年前後から急激に増加し、40年から50年の間に人口で約22,000人、世帯数で約6,600戸が増加した。50年代には、小規模かつ蚕食的な開発が主流をなしていった。当然、これらの開発の波は埋蔵文化財に影響を与え、行政としてその対応が求められるようになった。発掘調査としての対応は昭和52年以降からはじまり、昭和54年度からは、第一次5ヶ年計画で国庫及び県費補助による「大井町東部遺跡群発掘調査事業」として実施し、本年は第二次5ヶ年計画の2年次にあたる。

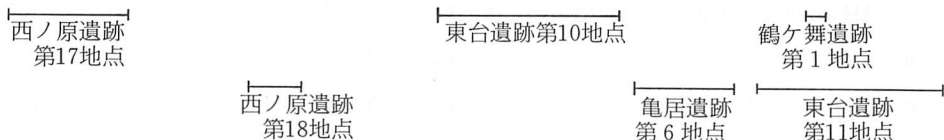
東部遺跡群は、文字どおり町の東部地域に集中している遺跡群の総称で、現在40ヶ所の埋蔵文化財包蔵地を確認している。昭和60年度の開発行為の中で、埋蔵文化財包蔵地内にかかり、影響を及ぼしたものは以下の6件である。

No.	遺 跡 名	所 在 地	原因者	面積	調 査 期 間
1	西ノ原遺跡第17地点	大井町大字苗間字西ノ原135-3	北沢 明	165m ²	昭和60年5月13日～5月22日
2	西ノ原遺跡第18地点	〃 〃 西ノ原141-2	神木 繁信	569m ²	〃 7月26日～8月5日
3	東 台遺跡第10地点	〃 大字大井字東台670-1	野溝 繁樹	896m ²	〃 10月1日～11月25日 昭和61年
4	亀 居遺跡第6地点	〃 大字亀久保字亀居1,000	関根 政江	914m ²	〃 12月3日～1月13日
5	鶴ヶ舞遺跡第1地点	〃 大字亀久保字鶴ヶ舞67-3	土屋みどり	499m ²	昭和61年1月28日～1月29日
6	東 台遺跡第11地点	〃 大字大井字東台673	大隅 康雄	660m ²	〃 1月14日～3月20日

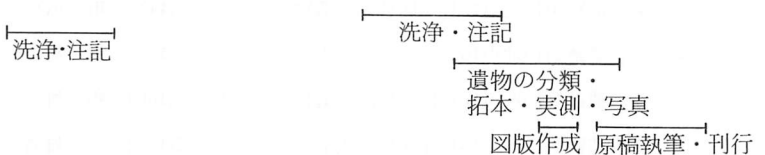
2. 調査事業の経緯

5月13日からの西ノ原遺跡第17地点の発掘調査を皮切りに、調査報告書刊行までの調査事業の経緯は下のとおりである。

現場作業



整理作業



1985年

4

5

6

7

8

9

10

11

12

1986年

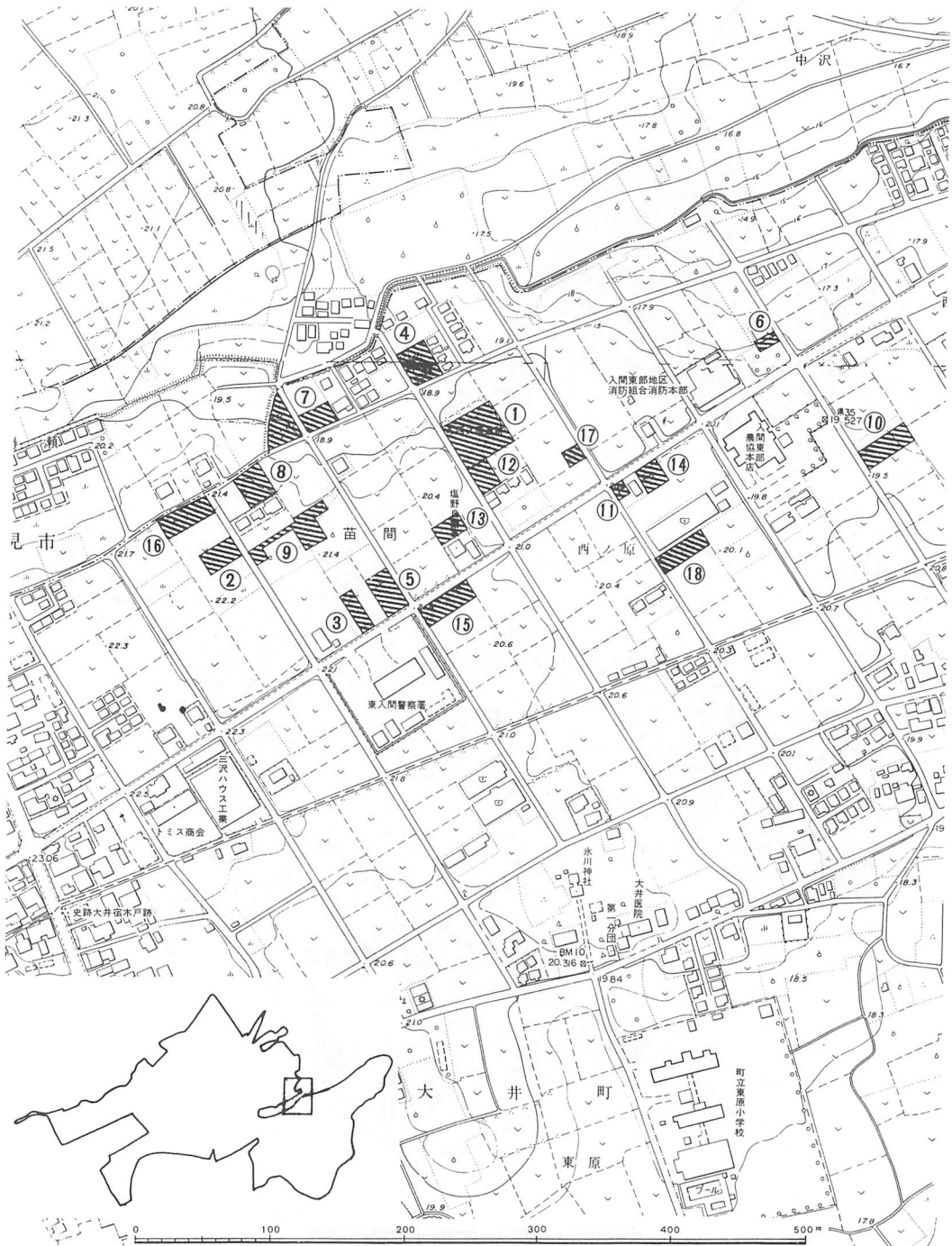
1

2

3

Ⅱ 西ノ原遺跡第17地点

Ⅱ 西ノ原遺跡第17地点

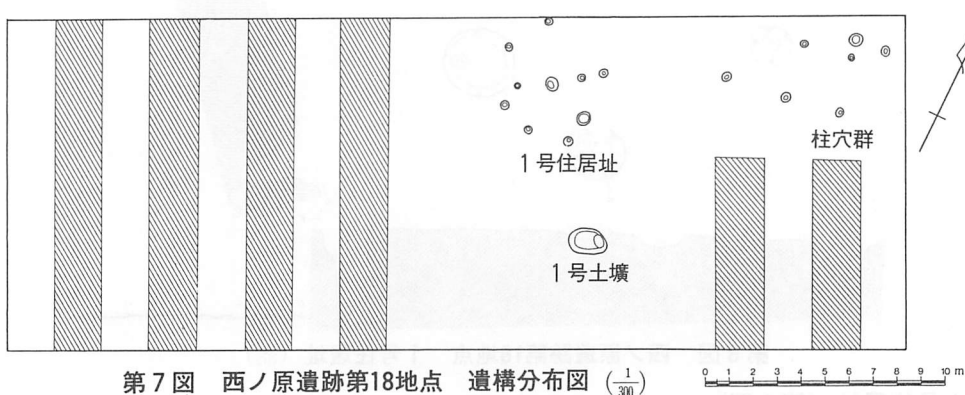


Ⅲ 西ノ原遺跡第18地点

第Ⅶ群土器（6～8）6は筒形深鉢の胴片で隆帯に縄文をつけ縦長区画文土器の胴片で、8は脚部で下端に沈線による文様がつく。いずれも2類に属する。

第Ⅷ群土器（9～41）9～12は口縁部片で、区画文深鉢で地文はLRの縄文である。10は内傾する口縁部で地文は撚糸であり、11・12は無文である。13～19は撚糸を地文とする胴片で13は頸部直下片で、14は貼付隆帯で懸垂文間に文様を作るもの。20は細い条線・22は櫛引条線の胴片。23・24は小形深鉢片で、弧線櫛引文を縦に施した加曽利EⅢ期のもの。25～32は、地文縄文のうえに、直行・蛇行懸垂文を幅広い磨消で表現したもの。30～31は地文の縄文部のみの胴小片。38～39は無文又は無文部の胴片。40は深鉢形土器の無文底部片。34・35は地文縄文の上に広い弧状磨消をもつ胴細片でEⅢ～EⅣ期のもの。36は細縄文薄手の胴片で、41は、底から直立して胴にひろがる深鉢の無文部片で5類末のもの。底径6.8cm。全体として遺物は第Ⅶ群土器が主体をしめる。本地点の周辺はすべて該期の遺構の検出だけで、本地点もその空間に属することは確実である。

Ⅲ 西ノ原遺跡第18地点



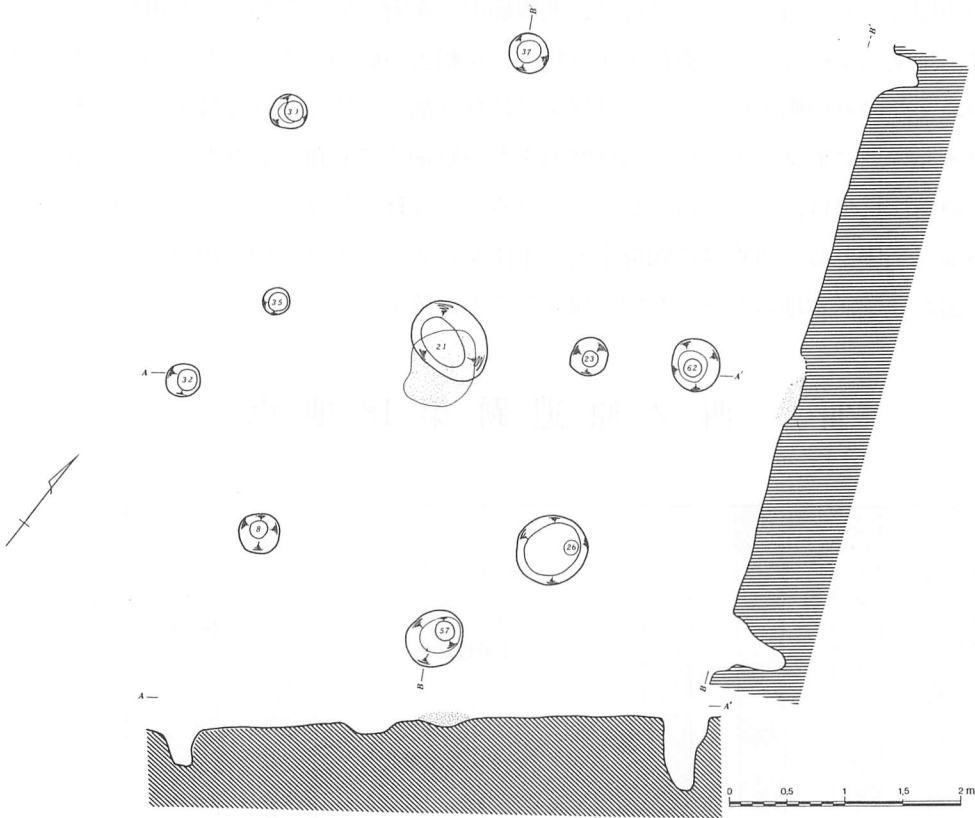
第7図 西ノ原遺跡第18地点 遺構分布図 (1/300)

1. 調査の概要と経過

第18地点は、遺跡の東南部に位置し、さかい川によって開析された狭小で浅い谷から約260mはいり込んでいる。調査は真夏日にかかり、調査区のすぐ北側には農業協同組合の倉庫があり、風通しが悪くまさに炎天下にうだるような酷暑の中での発掘調査となり、作業員にとってもハードな日々であった。巾2mのトレンチを南北に設定し掘り始めた。現地表面下からわずか20cm程度でローム層に達し、遺構が確認されても攪乱をうけていること

が予想された。7月30日に、調査区の中央部北側付近に黒褐色をした乾燥しきった表土を排除すると、焼土を中心として円形にめぐるピット群が検出された。また、さらに東側寄りにピット群、その他に土壌を確認、8月5日に調査を終了した。

2. 遺 構



第8図 西ノ原遺跡第18地点 1号住居址 (60)

(1) 1号住居址 (第8図)

調査区の中央部北側から検出された。

規 模 ローム面への掘り込みがなく、全体規模は明確にできないが、概ね半径 270cm 程度の円形を呈するものと思われる。

炉 ピット群のほぼ中心に位置し、焼土範囲は70×55cm。焼土層厚は10cm。

柱 穴 総数 9 個検出された。確認面からの深さは最高で62cm。平均30～40cmの深さ。

遺 物 深耕による攪乱のため確実に住居址に伴うものは3片のみである。(第9図)

(2) 土 壙

調査区の中央部から 1 基検出された。

3. 遺 物

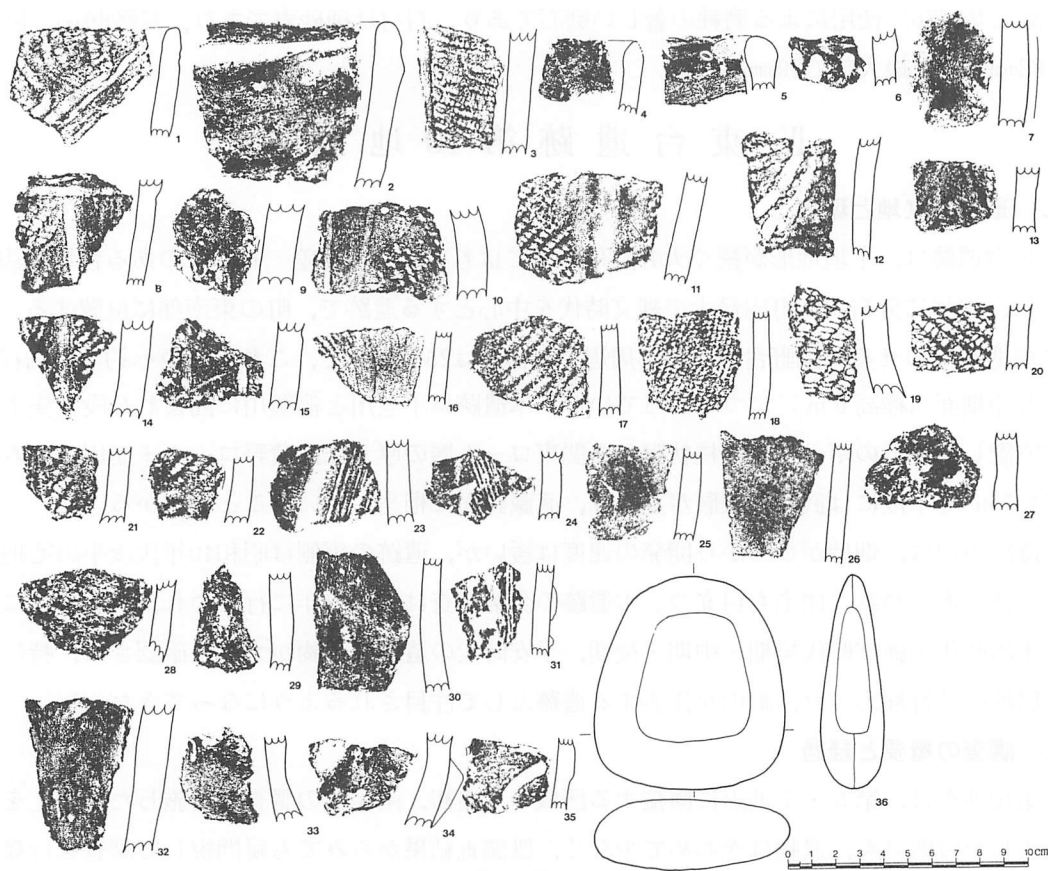
規 模 長軸150cm, 短軸110cm, 深さ35cm, 壁は西側でゆるく立ち上る。楕円形, 墳底は, やや段をもつ。長軸方位はN-65°-E。

覆 土 全体として軟質。1層は黄褐色土でしまりが無い。2層は褐色土。出土遺物なし。

(3) ピット群

調査区の北東隅にまとまって検出された。総数7個。うち5個は, 一定の間隔をもち規則性が見出される。桁行方向は, 東西方向をさし, 柱間間隔は, 南辺・北辺で215cm, 東辺で240cmとなっている。柱穴は20~30cm前後が多いが, 1本だけ51cmを測る。覆土は褐色土が主体でややしまりがある。出土遺物がなく時期は決定しかねるが, ほぼ東西に向く柱穴群で今回調査区域外にも延びている可能性はある。

3. 遺 物 (第9図)



第9図 西ノ原遺跡第18地点 出土遺物 (1/3)

微細片を含めて71片の土器が出土したが、深耕による攪乱のため確実に住居址に伴うものは3片のみであった。土器は文様の明らかなもののほとんどが第Ⅷ群3類（加曽利EⅡ）である。炉出土土器、1は小形深鉢の口縁部で、口唇直下に沈線をめぐらせL R縄文を地文とし磨消しによる蛇行懸垂文が口唇直下から垂下する。2は無文中形浅鉢の口縁部で、口唇直下外面に凹線をめぐらせ、口縁内側上面に幅3 cmに朱塗がある。

床面出土土器、炉近くの床面直上から出土した3は中形深鉢でR L縄文を地文とし磨消懸垂文を作る胴部片である。

表土中の土器、4は小形深鉢、5は中形浅鉢のいずれも口縁部片である。8～15は縄文を地文とし広い磨消懸垂文をもつ類で、6は口唇直下破片であり、長円形刺突文がめぐる中形深鉢と推定される。17～22は地文縄文のみの胴細片である。23・24は細い弧状条線を地文とする胴片で4類である。28～34は無文浅鉢又は深鉢無文部胴片である。

石器（9図36）使用による磨耗の著しい磨石であり、石材は硬砂岩であり、長径89mm。短径82mm。厚さ最大部で29mmである。

Ⅳ 東台遺跡第10地点

1. 遺跡の立地と環境

東台遺跡は、平坦地形が続く大井町にあってはもっとも比高差（6 m）のある台地縁辺部に、帯状に分布する町内最大の縄文時代を中心とする遺跡で、町の東南部に位置する。この遺跡をのせる武蔵野台地の遺跡周辺での標高は25～26mで、これより東へ約1.5km行くと沖積面（標高6 m）につながっている。本遺跡は不老川と柳瀬川に囲まれた段丘崖上に位置し、付近のボーリング柱状図から関東ローム層の厚さは武蔵野ローム＋立川ロームで4.75mで下位には武蔵野礫層が重なり、武蔵野面に相当していることがわかる。

遺跡周辺は、畑地がひろがり開発の速度は緩いが、遺跡の東側は昭和40年代後半の宅地化の波にあらわれ、住宅も目立つ。本遺跡の発掘調査は、1981年に行なわれ、これまでに先土器時代・縄文時代早期・中期・後期、平安時代の遺構や遺物が大量に確認され、特に住居址は55軒検出され、町内を代表する遺跡として注目されるようになってきた。

2. 調査の概要と経過

第10地点は、第5・7地点に隣接する区域で、当初、南半分の調査を実施した。表土を除去した段階でも、遺物はきわめて少なく、既調査結果からみても疑問視して調査を行なった結果、調査区南東部隅で縄文時代中期後半の住居址1軒と、土壇4基、柱穴6本を検出した。その後、北半分の細長い調査区を調査した結果、狭い面積であったが、4軒の縄文時代中期の住居と土壇1基が確認できた。調査区北側の一部は重機による掘削がされて



西ノ原遺跡第17地点 土 壙



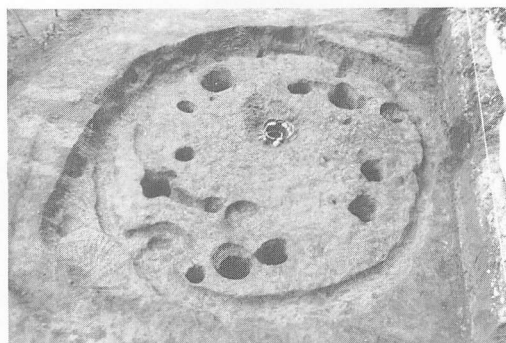
西ノ原遺跡第18地点 1号住居址



西ノ原遺跡第18地点 土 壙



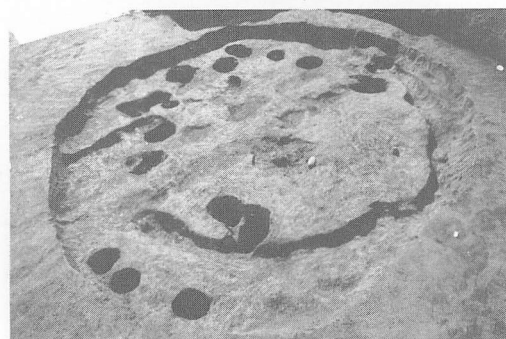
西ノ原遺跡第18地点 ピット群



東台遺跡第10地点 14号住居址



同 14号住居址 炉



東台遺跡第10地点 15号住居址



同 15号住居址 炉